

## 忘却された貨幣論

### ～貨幣・金融システムの虚構性と現実性～

熊本学園大学 岡本恵也

最高度な印刷技術を駆使し、国民的偉人の肖像が表面を飾り、法貨という権威に裏付けられているとは言え、われわれが今日「お金」として実感しうる「銀行券」はしょせん、しょせん「神」ではなく「紙」ではないかという疑問はつきない。

現代の貨幣・金融システムはその主要な貨幣媒体の形態を「可視的」な銀行券・補助貨幣から「不可視」の「電子情報」へと姿態変換の速度をますます加速している。貨幣・金融システムの全面的電子化は指呼の間にきている。「なぜ貨幣は受領されるのか？」という「貨幣論の根本問題」はますます謎を深めている。

現在の「拝金主義」を批判する「道学者」の喧しい声からは「拝金主義」の通底奏音が漏れ聞こえてくる。貨幣に恋いこがれ、貨幣に反発し、貨幣を嫌悪し、貨幣から逃避したいというこの相克する心的態度にこそ「貨幣物神」の謎は潜む。

さすがに時代の本鐸である芸術家は鋭い直観で「貨幣の謎」に挑戦し続けてきた。アンディ・ウォーホールはかつてドル紙幣を並べた作品を作った。マルチ芸術家、芥川賞受賞作家、赤瀬川原平の想像力、疑問力は自ら千円札を製造し、かつて「千円札事件」を引き起こした。優れた芸術家は社会関係の核心を衝く。「貨幣の謎」が社会の根源的な謎であることを示唆している。芸術家ならぬ社会学者はこの疑問に理論的に答える責任を負う。

貨幣論は貨幣の歴史、制度と密接不可分である。マルクス学派の恰好のテーマであった。が、マルクス学派は「貨幣は金である」という『資本論』の呪縛から逃れられず、現代の貨幣問題から逃避している。かくて貨幣理論は忘却され「忘却された貨幣論」となった。

岩野茂道「システムマネー論」、楊枝嗣朗「イマジナリーマネー論」は現代の貨幣の謎に果敢に挑んだ優れた貨幣論である。

両氏の貨幣論はマルクス批判の貨幣論にもかかわらず、客観的にはマルクス物象化論の理論的神髄を継承、発展させるものである。「システムマネー論」、「イマジナリーマネー論」は貨幣の虚構性を鋭く摘出する。しかし、現代の貨幣問題は金融問題でもあり、マネー論はマネーキャピタル論へと向かわなければならない。「失われた10年」の経験を通して、マネーとマネーキャピタルの関連性を問い、貨幣・金融システムの虚構性こそが現代資本主義のダイナミズムを媒介しグローバルイゼーションを牽引することを明らかにする。「虚構性」こそ「現実性」であり、「現実性」こそ「虚構性」である、という弁証的貨幣論を展開したい。